

『エウテュプロン』におけるソクラテスの対話術

イウ マンイー

はじめに

『エウテュプロン』はプラトンの対話編の中で初期の作品に属しているものであるとみなされている。対話を交わしているのはソクラテスとエウテュプロンの二人だけである。対話編の主題は「敬虔とは何か」についてである。

ところが、いくつかの議論が重ねられても、「敬虔とは何か」についての明確な答えが結局提供されていなかったと思われる。それはなぜなのか。また、答えのない問いの価値はどこにあるのか。もし結果より過程のほうが大事であるという考えがこの対話編に当てはめることができるならば、過程であるところの対話のやり取りの価値はどこにあるのか。本論文では我々はこの問題を思索することにした。

1. 関心の共有

対話はソクラテスとエウテュプロンとの偶然な出会いから始まったのである。しかし、この偶然はこの対話編において決して偶然ではなく、むしろ意図的にこのように設定されていると思われる。このことを以下の考察を通じて明らかにしたい。

ソクラテスがかかわっている裁判は公訴と呼ばれるもので、起訴しているのはメレトスという若者である。彼はソクラテスを自分と同年代の若者たちを墮落させているものと見なして、国家に向かって訴訟を起こした。理由はソクラテスが神々の創作者であるとみなされており、しかもソクラテスは新しい神々を作った上で、従来の神々を信じていないと思われるからである。

一方、エウテュプロンは殺人罪で自分の父親に対して訴訟を起こしている。事情は以下のようである。彼の畑で働いているある雇い人が酔っ払って、ある奴隷に怒り、そして殺してしまった。そこで、エウテュプロンの父親がその雇い人の手足を縛り、溝の中に放り込んで、これからどうすればいいのかということを訊ねるために聖職者のところに人を送った。その間、雇い人を溝の中で放置したままだった。そのため、聖職者のところから人が帰ってくる前に、雇い人はすでに死んでしまったのである。それでエウテュプロンはその殺人犯である雇い人のために、自分の父親を殺人罪で起訴しようとしているのである。

以上は二人が抱えている訴訟の成り行きである。ソクラテスは国の神々に対して不敬虔であると思われるから公訴されているところである。一方、エウテュプロンは訴訟のせいで、父親と他の身内から批判を受けた。つまり、父親は実際に殺したわけでもなく、仮にそうしたとしても、死んだのはただの殺人犯であるので、その人のために自分の父親を訴えるのは不敬虔である。その時、二人とも「不敬虔」なことをしていると思われる。また、そう思われることによって、二人とも「敬虔とは何か」という問題に関心を強くもっているだろう。

ソクラテスの場合、彼はこの裁判のためにリュケイオンのいつもの過ごしている場所を離れて、わざわざバシレウスの役所まで足を運ばなければならない。それで、彼は若者たちや友人たちとの対話で楽しむ時間が減ってしまう。また、その訴訟に対するソクラテスの心境が以

下の台詞から読み取ることができる。「もし彼らがぼくを笑うつもりでいるのであれば、ふざけたり笑ったりしながら法廷で時間つぶしをするのも、何も不愉快なことではないだろう。しかし、もし彼らが本気になろうとするならば、それはもう、いったいどんな結果になることか、君たちのような予言者でもなければ、分からないことなのだ」(3d9-e3)。さらに、「敬虔」のことを確実に知っているというエウテュプロンから聞いてすぐに、ソクラテスはこう言った。「ぼくにとって一番のいい方法は君の生徒になり、そしてメレトスによる公訴の前に異議を申し立てることだ」(5a3-5)。こうして、この裁判はただの笑いごとだけで済まないと思ひ、むしろどんな結果が自分にもたらされるのかが想像つかないほど、ソクラテスはまったく平気な様子ではなかつたろう。また、敬虔の知識を学ぶ必要があると思ひ、エウテュプロンの生徒になりたいと言ったことからみて、その言葉に多少の皮肉が混ざっているとしても、ソクラテスはやはりこの裁判のことに気を掛けていたのだろう。実際のところでは、ソクラテスはどのくらいメレトスらの訴訟に悩まされたかどうかは分からないが、しかし、少なくともこの対話編では、彼はある程度において裁判のことを心配していると設定されているように見えるのである。

一方、エウテュプロンの場合、彼はソクラテスによって「敬虔とは何か」への探求の意欲が高められているように思われる。彼はそもそも父親に対して訴訟を起こしたことを正しいと思っている。このことによって彼は父親や身内などから不敬虔であると批判を受けたが、しかし、彼は自分の行為を不敬虔であると思わない。かえって、身内たちが敬虔について知識を欠いているから、正しく判断することができなかつたと思っている。そして、裁判の手続きなどのためにバシレウスに出かける時のエウテュプロンはおそらく自分の行為の正しさに対して自信をたっぷり持っていることであろう。ちょうどその時そのところで、彼はソクラテスと会ったのである。事情をソクラテスに説明したところ、意外とソクラテスから同意をもらえず、むしろ父親に対する訴訟を起こすことはもしかして

不敬虔な行為ではないのかと疑われ、「敬虔とは何か」を確実に知っているかどうかを聞かれた。このように聞かれることによって、またソクラテスとのその後の対話を通して、彼はおそらく「敬虔とは何か」の知に対する自信が揺らぎ、代わりに思考の意欲がだんだんと高められたのだろう。実際のところでは、エウテュプロンはどのくらい自信が揺らぎ、どのくらい思考の意欲があつたのかがはっきり分からないが、しかし、少なくとも、この対話編の中では、彼はソクラテスに出会ったことによって思考の意欲が高まってきたと設定されているだろう。

以上のような設定は、二人が話題となっている「敬虔とは何か」について関心を共に持っているということを表すために、必要であると思われる。なぜなら、真実の探求において、探求される事柄に深くかかわればかかわるほど、探求の意欲が高まってくると思われるからである。それで、この対話編では「敬虔とは何か」への探求の意欲は二人の関心の共有によって、高まってきたように設定されているのである。

2. 敬虔の知識

関心の共有だけではなく、二人の敬虔に関する知識もまた意図的にそうであるように決められていると思われる。このことを以下の考察を通じて明らかにしたい。

国に不敬虔であるという罪によって公訴されているソクラテスは、神々に対する自分の敬虔さについてはまったく触れていなかった。また、その公訴は正しいものであるのかどうかについても語っていなかった。代わりに、ソクラテスは自分を訴える相手、メレトスのことについて以下のように言っている。「僕にはただ一人彼だけが正しい仕方でも国事に取り組み始めているように見えるのだよ。……確かにこんなふうにして事を始めるものには、それは当然起こってしかるべき結果だからね」(2c8-9)。このように、ソクラテスは自分のことを弁解するより、むしろ相手がやっていることを正当化しようとしている。もちろん、そこに皮肉を読み取ることもできるが。

一方、エウテュプロンは違うように考えてい

る。「そうなってほしいものですがけれどもね、ソクラテス。しかし、私はその反対になりはしないかと心配するのです」(3a6-7)。ソクラテスとは違って、メレトスの起した訴訟がソクラテスに不正を加えるために、正しい仕方で行事を取り組むより、むしろ国を害すると考えているようである。また、その公訴の成り行きを聞いたエウテュプロンは、ソクラテスがただダイモンの合図が自分に現れると言っただけであり、ソクラテスの行為は神々に不敬虔であるわけではないと考えた。むしろ、この公訴は中傷のほかに何ものでもないと言った。そして、自分がどうされるかが分からないソクラテスに対して、エウテュプロンは裁判で相手と戦うべきだと主張している。「彼らのことなど何も意に介することはありません。いや、堂々と相手になるべきです」(3c4-5)と言った。また、もしメレトスが訴訟を取り下げようとしなければ、自分の代わりに法廷に言い立ててほしいとソクラテスに言われたときに、彼は以下のように言った。即ち、「万が一彼がこの私を公訴しようとするならば、私は彼の弱点がどこにあるかを発見できることと思います。そして法廷では、私よりも、あの男のほうがはるかに議論の的となることでしょう」(5b8-c3)。このせりふから、彼は全く恐れる様子がなく、むしろソクラテスの裁判には自分が訴えられる当事者であれば勝つ自信があるように見える。

以上のような二人の会話によって、エウテュプロンのほうが敬虔に関する知識をよりもっていて、しかも自分が知っていると思っただけのように示されている。実際、ソクラテスに「敬虔なことや不敬虔なことについて、それらがどうあるものかをそんなにも確実に知っていると思っただけかね」(4e4-6)と聞かれるときに、彼は迷いなく「だって、ソクラテス、それではなければ、私はまったくの役立たずということになるでしょうし、それにまた、このエウテュプロンは世の大衆にくらべて何ら立ち勝ってはいないことになるでしょう、もしもそういったことすべてを私が正確に知っていないとすればですね」(4e9-11)と答えた。そして、このように断言したエウテュプロンに対して、ソクラテ

スは「敬虔とは何か」を問い詰めはじめたのである。

実際のところでは、自分の行為について、正しいかどうか、敬虔であるかどうかということ、ソクラテスは知っていないわけではなかっただろう。少なくとも、「自分の持っているものなら何でも惜しみなくあらゆる人に語って聞かせる」(3d6-8)ことをソクラテスはおそらく正しいと思っているし、自分がダイモンの合図が現れると語ることは神々に不敬虔であるとはきつと思っていなかっただろう。つまり、彼は自分の行為の正しさを支えるところの根拠として、敬虔についての知識をもっているとも考えられる。しかし、対話編の中では、彼は自分の行為を正当化しようとしなかった。それはおそらく彼は知っていない立場に立っていると設定されているからである。この設定はソクラテスの対話術において、関心の共有の点と同じように重要であると思われる。その目的は以下のように推測することができる。すなわち、ソクラテスは、異なる判断根拠を持っている相手と議論しながら、どちらのもっている知識が正しいかどうかを決めるための議論の技を披露する者を演じているわけではなかった。むしろ、相手の持っている知識が本当に正しいかどうかを明らかにするために、ソクラテスは誘導する役目をもっているものとして登場していたのであろう。このことは二人が「敬虔とは何か」について議論をする中にも確認できると思われる。後ほど、議論の流れを検討するときに、この問題をもっと詳しく説明したい。

3. 定義のあり方と三つの議論の概要

(i) 定義のあり方

吟味を誘導する役目をもっているソクラテスは議論の前にまずどのように定義を答えてほしいかということ、エウテュプロンに説明した。「君は今明確に知っていると言ったことを僕に言ってくれたまえ。つまり、殺人について、また他の物事について、敬虔とはどのようなものであるのかと君は言うのか、また不敬虔とはどのようなものであるのかと君は言うのか。それとも、敬虔はすべての行為においてそれ自身

と同一であるのではないのか。また、不敬虔はすべての敬虔とは反対であるが、しかし不敬虔はそれ自身に似ているものであり、不敬虔であろうとするすべてがその不敬虔さに即して、一つの何らかのアイデアを持っているのではないのか」(5c8-d6)。ここでソクラテスが求めている答えはすべての敬虔である行為にも当てはまることができるような共通的なものである。つまり、敬虔の定義である。

しかし、このソクラテスが求めている定義というものをエウテュプロンはまだ理解していないと思われる。このことは彼が敬虔と不敬虔について提示した答えから示されているのである。彼の回答は以下のようなものである。即ち、今自分がなしていること、つまり、間違っただけをした人に対して、その人は父親であろうか母親であろうかは関係なく起訴する、ということは敬虔である、また、起訴しないのは不敬虔である。このようにして不正を正すというような行為を敬虔である行為の中のひとつの事例でしかないということに彼は気付かず、それを敬虔の定義として定めようとした。そこで、彼が定義というものを理解していなかった様子だったため、ソクラテスはもう一回求めている答えのあり方を彼に説明するのである。その内容は以下のようなものである。

「僕が君に要求していたのは、多くの敬虔なことからの何か一つ二つを僕に教えるのではなく、むしろすべての敬虔はそれによって敬虔になるところのかのエイドスそのものを教えるということなのだ。というのも、おそらく一つのアイデアによって不敬虔なことは不敬虔であり、敬虔なことは敬虔であると君は言ったからだね。それとも、君は覚えていないのか」(6d9-e1)。この「一つのアイデアによって、不敬虔なことは不敬虔であり、敬虔なことは敬虔である」ということがすでに一回目のソクラテスが求めている答えのあり方を説明するときに触れられていたものであり、エウテュプロンはこのことを覚えていると示した。それで、ソクラテスはもう一回彼に正しい答えのあり方に沿って、「敬虔とは何か」の検討を最初からやり直そうとする。「では、そのアイデアそれ自体とはいかなるも

のなのかを僕に教えてください。僕はそれに注意を払い、それを模範として用いながら、君と他の人の行為についてその模範と同じようなものを敬虔であると僕は言うため、同じでないようなものをそうとは言わないために」(6e3-6)。ソクラテスの要求に答え、「もしあなたがそう望んでいるならば、ソクラテス、私はそのようにあなたに話しましょう」とエウテュプロンは自信たっぷりの様子で自分の知っていることをソクラテスに教えようとすることを示す。

このようにソクラテスが二回に渡って求める答えのあり方を説明した後、エウテュプロンは敬虔と不敬虔を「神々に愛されるものが敬虔であり、愛されないものが不敬虔である」(6d10-7a1)というように答えた。今度、ソクラテスはこの答えが見事な仕方では答えられていると言った。即ち、この答えが一応定義になっているということをソクラテスは認めたのである。しかし、それは敬虔の定義であるかどうかはまだ分からないため、「君は、君が言っていることは真実であるということを示すために説明してくれることだろう」とソクラテスは彼の定義を徹底的に検討する必要があるということを示し、定義の吟味を本格的に開幕する。

吟味の全体を三回に分けてまとめることができる。それぞれの概要は以下のとおりである。

(ii) 三つの吟味の概要

一回目の定義は「神々に愛されるものが敬虔であり、愛されないものが不敬虔である」ということである。定義のあり方によれば、敬虔が不敬虔には正反対のものであるが、敬虔は敬虔それ自身と同一である。また同じように、不敬虔が敬虔には正反対のものであるが、不敬虔は不敬虔それ自身と同一である。一方、エウテュプロンが同意した事柄によれば、神々の間に意見の相違による争いがある。意見の相違があるということは、神々の間に愛されるものと愛されないものが必ずしも同一ではないということになる。言い換えれば、同じものはある神々に愛されうると同時に、別のある神々に憎まれうる。つまり、同じものは敬虔でも不敬虔でもあるということになる。このことは定義のあり方と矛盾する。よって、この定義は正しくないも

のになる。つまり、神々の間に争いがあるというエウテュプロンの考えとこの定義との間には矛盾があり、ソクラテスはこの矛盾を示したということによって、この定義を論駁したわけである。

そこで、エウテュプロンは、この矛盾を解消するために、「すべての神々が愛するものは敬虔であり、そして反対のこと、つまり、すべての神々が憎むものは不敬虔であると私は主張するのだ」（9e1-3）と定義を修正した。今度ソクラテスは、「一つのアイデアによって、不敬虔なことは不敬虔であり、敬虔なことは敬虔である」ということの定義のあり方に基づいて、敬虔である理由が神々に愛されることになるかどうかを考えることにする。吟味の結果、敬虔なものは敬虔であるために神々に愛されるのであって、神々に愛されるために敬虔なものになるのではないということが分かってきた。つまり、神々に愛されることは敬虔のひとつの性質（属性）であるが、敬虔が敬虔であるために、その理由を示すものではない。よって、この定義も正しくないものになる。つまり、エウテュプロンのこの修正は単なる矛盾を回避しただけのものであり、正しいあり方における敬虔の定義には至らなかったわけである。

二回目の議論が論駁されたあと、エウテュプロンは「私としては自分の考えをどのようにあなたに言ったものか、さっぱり分からないのです」（11b6-7）と言い、ソクラテスが求める定義のあり方は理解していなかったことを示す。そこで、ソクラテスは自ら「敬虔であることすべては必然的に正しいものの一部分である」（11e4-5）ということを示し、「いったい敬虔は正しいもののどの部分になっているのか」とエウテュプロンに説明を求める。つまり、敬虔が正しいもののどのような部分かを正確に答えることができるならば、ソクラテスが求めている定義のあり方に適うような回答になるわけである。このようにエウテュプロンはソクラテスに導かれて、再び「敬虔とは何か」についての対話を続けようとするのである。これは三回目の議論の始まりである。

エウテュプロンはまず「神々の世話に関わる

部分は敬虔である」（12e6-7）と言う。「神々に対する世話」ということを敬虔に当てはめることはおそらく当時の一般的な考え方であったかもしれない。しかし、「世話」ということはどんな意味を持っているのか。また、どのように敬虔につながっているのか。そこで、ソクラテスはまず「世話」の一般的な意味を検証することにする。即ち、世話というのは、世話をする人が世話されるものの利益を考え、それをよりすぐれたものにしようとするために行うことである。このように、もし世話が何らかの利益をもたらすために行うことであれば、「神々に対する世話」も当然同じように何らかの利益を世話する我々は神々に与えているはずであろう。というわけで、ソクラテスは「それでは、神々の世話である敬虔は神々にとってどのような利益になるのか、また、どのように神々をより優れたものにするのか」（13c6-7）とエウテュプロンに聞いたのである。しかし、エウテュプロンはこのことに直接に答えることを避け、かえって、「神々の世話は奴隷が主人に対する世話のようなものである」（13d5-6）と言い直した。今度、ソクラテスはこのことを「つまり、それは神々に対する一種の奉仕術であろうと」（13d7）と解釈し、「神々にとっての奉仕はどんな仕事の完成における奉仕であろうか」とエウテュプロンに説明を求める。しかし、エウテュプロンはまたこの点について答えることを避け、別のよう言い換える。彼の言ったことをソクラテスはこのようにまとめる。「犠牲を捧げたり祈ったりする知識の一種だということではないかね。また、犠牲を捧げるということは神々に贈り物をするのであり、祈ることは神々に請願することではないのか」（14c5-9）。さらに、ソクラテスはこのことを神々と人間との交易であると言い、神々がこのような交易において人間から受け取る利益は何であろうかと彼に聞いた。エウテュプロンは利益という点について答えることを避け、「それは尊敬、賛美、そして、私が今まで言ったように、つまり、感謝だ」（15a9-10）と提示する。またそれらのことを「神々に最も愛されるものだ」（15b3）と強引に言う。こうして、議論は前回の議論の最初のところに戻つ

てしまった。前回の議論において、神々に愛されるものは敬虔であるということはすでに論駁されていた。

そこで、ソクラテスはもう一回「敬虔とは何か」を最初から考察しなおそうと誘うが、エウテュプロンは時間が無いという口実でその場を去る。結局、三つの議論はこのようにすべてが論駁された形で幕を閉じる。

4. ソクラテスの対話術

以上に述べた三つの議論は確かに全部論駁されてしまったが、しかし、それらの議論の中から、ソクラテスの対話術のあり方を以下のように掴むことができると思われる。まずすぐにでも目に付くのが「相手の同意を求める」ということである。このことは議論の全体に渡って見られる。議論を進めている際、「そのとおりです」、「そう思います」、「確かに」、「いかにしてそうでないことがありうるのか」、「おっしゃることは真実です」などの返事をしてもらうように、ソクラテスは必ず相手の同意を求める。彼は、それらの同意された事柄の真偽を問うことをせずに、ただ同意された事柄だけを通じて、「敬虔とは何か」についての相手がもっている知識を明らかにしようとする。そして、それらの知識の間における矛盾点を指摘しながら、相手の主張を一つずつ論駁していくのである。「相手の同意を求める」ということはささやかなことであると思われるかもしれないが、しかしソクラテスの対話術のあり方において考えてみると、実に重要であるに違いない。その重要さを議論の中身を踏まえながら、もっと具体的に検討したい。

一回目の議論において、エウテュプロンは「敬虔とは何か」を「神々に愛されるものは敬虔であり、愛されないものが不敬虔である」というふうに述べる。しかし、この定義は、神々に愛されるもののあり方と、敬虔と不敬虔のあり方との間に矛盾が生じるということが見えてきたため、ソクラテスに論駁されたのである。この両者の矛盾点は以下のやり取りにおいて明らかになっている。

まず、この定義を述べる前に、自分が不正を

犯した父親を起訴するということが不敬虔ではないと主張したエウテュプロンはすでに自分の行為の正しさを支える根拠として、神々の事柄を提示した。例えば、ゼウスは不正をした父親を縛ったことがあるし、その父親もまた不正をした自分の父親を去勢したことがある。エウテュプロンは神々がこれらのことを本に行ったと信じているから、彼らのことを基準として見なしている。一方、これらの神々の出来事について、ソクラテスは自分自身がなかなか受け入れようとしていなかったが、ここでは一応エウテュプロンに従い、これらのことを事実として認めておいて、「もしも君のようにこういった事柄についてよく知り抜いている人までがそれらの話を承認するのであれば、これはどうやら、我々としても、それに同意しないわけにはいかないようだ」(6a9-b2)と返事した。そのあと、ソクラテスはもう一度、「本当に君はそんなことが事実そのとおりに起こったと考えているのかね」(6b4)と彼に確認を求めた。さらに、「では君は、本当に戦争というものもあると考えているのかね、神々の間でお互いに対してね……それらは真実のことであると我々は主張したものであろうか」(6b7-8、c3-4)と尋ねて、エウテュプロンは「いや、そればかりではありません、ソクラテス、たった今も言ったことですが、お望みとあれば、神々のことに関して他にもたくさんのことを、私はあなたに話しましょう」(6c5-7)と自分が神々に関する事柄をよく知っているということを明確に示した。

この対話のやり取りから、ソクラテスがエウテュプロンから提示された事柄の真偽を問うていなかったということと、またどのようにして「神々の間に実際に争いがある」ということを彼から聞き出したかということがよく見えるだろう。神々の事柄がそのとおりに起こったことを信じて、そして、自分の行為の正しさを神々のことに照らしながら判断しようとするエウテュプロンに対して、ソクラテスは神々の事柄における信憑性について彼と討論するのではなかった。ここでソクラテスが行おうとしたことはまずエウテュプロンの主張がいかなるものなのかを彼自身の言葉による同意を通じて明らかにし

ようとしたことであろう。

「神々の間に実際に争いがある」ということはまた一回目の議論の中でも、ソクラテスが争いの原因を問うている時にさらに展開されるのである。「また、神々が争いをするということ、互いに意見の食い違いがあり、彼らの間には互いに対する敵意があるということ、このことも言われたね」(7b2-4)というソクラテスの質問に対して、エウテュプロンは「確かに言われました」と答える。このようにエウテュプロンは「神々の間に意見の相違による争いがある」ということを同意するのである。しかし、このことは彼が提示した定義、つまり「神々に愛されるものは敬虔であり、愛されないものは不敬虔である」ということに矛盾している。

ソクラテスはまず敬虔と不敬虔のあり方について説明し、彼の同意を求める。即ち、「敬虔は不敬虔に対して同じものではなく、むしろ正反対のものです。そうではないのか」(7a8-9)とソクラテスは聞いて、「そのとおりです」とエウテュプロンは答える。そしてすぐにソクラテスがもう一回「そしてよく言ったと思われるのか」と聞いて、エウテュプロンは「私はそう思います」と答える。ここでソクラテスは二度に渡って、「敬虔と不敬虔とは正反対のものである」ということについての同意を彼から求めた。このような二度の同意はこれからの論駁において重要であることなので、エウテュプロンに明確に自分自身の主張を理解させるために必要があるのだろう。

また、「神々の間に意見の相違による争いがある」ということから、議論は以下のように展開されるのである。その成り行きは以下のとおりである。(S－ソクラテス、E－エウテュプロン)

S:すると、それぞれの神々は美しく、善く、そして正しいと考えるものどもを愛し、またそれらと反対するものどもを憎むのか。

E:そのとおりです。

S:では、同じことについて、君が言ったように、ある神々は正しいと考えて、別の神々は正しくないと考える。そして、それらについて、互いに論争した上で紛争し、また戦争をする。そもそものようになっていないのか。

E:そのとおりです。

S:すると、察するに、同じものでも神々によっては憎まれもし、また愛されもするだろう。

E:そう思われます。

S:この説によると、同じのものが敬虔でもあり、不敬虔でもあるのであろう。

E:そうかもしれません。

(7e6-8a9)

こうして、ソクラテスはエウテュプロンが同意した事柄をもって彼の定義を論駁するのである。つまり、ソクラテスが尋ねたのは「敬虔とは何か」と「不敬虔とは何か」ということであり、両者は同じものではなく、正反対のものである。このことはすでにエウテュプロンが二回に渡って同意したことである。それなのに、今エウテュプロンが同意したように、もし「神々の間に意見の相違による争いがある」ということが本当であれば、同じものが神々に愛されるものでもあれば神々に憎まれるものでもある。言い換えれば、神々によって愛されるものは一致していないし、憎まれるものも一致していない、ということになる。また、以下のように言うこともできる。即ち、同一のものであっても、神々によって愛されることでもあれば憎まれることでもある。もし神々に愛されるものが敬虔で、憎まれるものが不敬虔であるならば、今までの議論によると、同一のものが敬虔でもありながら、不敬虔でもあるということになってしまう。これはエウテュプロンが同意した敬虔についての定義のあり方と矛盾している。彼の同意したことによると、敬虔と不敬虔とは同じものではなく、むしろ正反対のものである。しかし、検討した結果、敬虔と不敬虔とは同じものでありうる。なので、「敬虔は神々に愛されるものであり、不敬虔は神々に憎まれるものである」という定義は正しくないという結論になったのである。

しかし、定義はこのように矛盾が生じることによって正しくないという結論になったが、エウテュプロンはこのように論駁されることに対して、完全に認めているわけではなかったように見える。そのことは彼の「そうかもしれません」という返事から見取ることができる。今までの議論の流れにおいて、「そのとおりです」、「当然です」、「おっしゃることは正しいです」な

どのように、強い肯定的な返事を下していたが、定義が論駁されるようになったその時だけに、彼はただ可能性を示すような返事、「そうかもしれない」と言うのである。そのような返事は彼がまだ完全に納得していないことを示しているだろう。

そこで、彼は定義の矛盾点を防ぐために、定義を「神々に愛されるものは敬虔であり、愛されないものは不敬虔である」ということから、「すべての神々に愛されるものは敬虔であり、すべての神々に愛されないものは不敬虔である」というふうに修正する。つまり、エウテュプロンはある神々に愛されるが、他の神々に愛されないという可能性を排除し、ただ「すべて」の場合だけを取り上げて、それを敬虔の定義としたのである。一方、ソクラテスはこのことについて彼と討論することをせずに、ただこの修正した定義を考察するだけである。そして、この修正は、「神々に愛される」ことが「敬虔である」ということの理由ではなく、ただの一つの性質(属性)であるため、簡単に論駁されるのである。このように修正した議論が論駁されたあとに、彼はこれ以上定義を修正することを諦め、「おっしゃることは真実です」と答え、論駁されたことに納得した様子を示すのである。しかも、二度も論駁されたエウテュプロンは、ソクラテスにもう一度最初から検討しなおそうと誘われるとき、自分の考えをどのように言えばいいのかが分からないことを述べ、議論に行き詰まっていることをさらに示したのである。

そこで、ソクラテスは彼を誘導しながら、自ら三回目の議論を再開する。この三回目の議論において、「相手の同意を求める」ということはもう一つの役割があると思われる。それは相手自身の提示した説明や主張などをもっと相手自身に吟味してもらうためにあることであろう。この役割はなぜ三回目の議論においてももっとも著しく現れてきたかという点、おそらく以下のことによるのであろう。即ち、同意を表明することがもしかしてこれから自分を追い詰めてしまうことになるかもしれないということは、エウテュプロンが前の二回の議論の論駁によってすでに学んできたことである。したがって、

今度こそ自分の考えをもっと注意深く吟味するようになっているはずである。一方、ソクラテスも彼の注意深い吟味を期待している。そのため、今回の議論において、ずっと彼の提示した説明の意味を解明しながら、また彼の同意を求めながら、彼の考えを彼自身において吟味させようとするのである。このことは二人の対話を踏まえながら、確かめてみよう。

「いったい敬虔は正しいもののどのような部分になっているのか」というソクラテスの問いに対して、エウテュプロンは「正しいもののこの部分、即ち、神々に対する世話の部分には敬神や敬虔であり、他方、人間に対する世話の部分は正しいものの残りの部分である」(12d5-8)と答えた。この説明にも見えるように、彼は「世話」という一つの言葉を「神々に対する」と「人間に対する」という二つの範囲に当てはめようとした。そこで、ソクラテスは世話ということが一般的に何かを意味しているのかを述べ、彼の同意を求めることにする。即ち、「すべての世話は同じ目的を成し遂げるのではないのか。例えば、こういうことだ、つまり、それは世話されるものの何らかの善と利益を目指しているのだ。……それとも君にはそうは思われぬかね」(13b7-11)とソクラテスは説明し、それに対してエウテュプロンは「そう思われます」と答える。このようにソクラテスは「人間に対する世話」について彼の同意を得る。そして、「神々に対する世話」において何らかの善と利益を神々に与えることができるかとソクラテスはさらに聞いたら、エウテュプロンは神々に与える善と利益という点に答えることを避け、神々に対する世話が「奴隷が主人に対して世話をするところの世話だ」(13d5-6)と言い直した。すると、ソクラテスは再び彼の説明を自分がどのように理解しているのかを述べる。「分かった。それはつまり、神々に対する一種の奉仕術なのだろうと私は理解しているよ」(13d7)。エウテュプロンはそれに同意した。

今度、ソクラテスは奉仕術とは何かについて、例を取り上げながら自分の理解を述べる。例えば、医者が行う奉仕術は健康の完成のためにあるものであり、造船の人が行う奉仕術は船の完

成のためにあるものであり、建築家が行う奉仕術は家の完成のためにあるものである。これは奉仕術の一般的な理解である。それらについて、エウテュプロンはすべて同意する。しかし、「神々が我々を奉仕者に用いて達成しようとする美しい仕事は何であろうか」(13e10-11)とソクラテスに聞かれたとき、彼は再び「美しい仕事」という点に答えることを避け、以下のように言い直す。即ち、「もし人が祈りや犠牲を捧げる時に神々の望んだことを言ったり行ったりすることを知っていたら、それらのことは敬虔である。またこのようにすると、自分の家も国家大衆のことも見守られます。しかし、神々の望んだのと反対のことは不敬虔である。このようにすれば、全てが転覆し、破壊されます」(14b2-7)。

ソクラテスは彼の説明を聞いて、奉仕術を「犠牲を捧げることと祈ることの一種の知識であり、またその知識は敬虔である」というような自分の理解についてエウテュプロンに確認を求める。そして、ソクラテスは「犠牲を捧げる」ことを「神々に贈り物をする」と解釈し、「祈ること」を「神々に要求する」と解釈する。このことについてもまたエウテュプロンの同意を得る。そしてソクラテスは、これらのこと、つまり、「神々に贈り物をする」と「神々に要求する」の知識は敬虔であるなら、「してみると、敬虔とは神々と人間との間の一種の交易術であることになるよなだね」(14 e 6-7)と述べ、いかにしてこの交易が成り立つかということの説明をエウテュプロンに要求する。

S：この交易に際しては、我々は彼らからあらゆる善いものを受け取るけれども、彼らの方はわれわれから何一つ受け取らないというほど、それほど我々の儲けは彼らより大きいのだろうか。

E：しかしいったい、あなたは神々が、我々から受け取るものから利益を得られるとでも考えているのですか。

S：だがそうすると、我々から神々に送るその贈り物とは、いったい何であることになるのだろうか。

E：尊敬、賛美、また神々に嘉納される感謝以外の何をあなたは考えていますか。

S：すると、敬虔というのは、神々に嘉納されるものではあるけれども、しかし神々にとって有益なものでも、神々に愛されるものでもない

ということになるのだね。

E：いいえ、私としては何にもまして一番愛されるものだと思います。

S：してみると、どうやらまたしても、敬虔とはそういうもの、つまり、神々に愛されるものであるということになるようだ。

E：ええ、何にもまして。

(15a2- b 6)

ここまできて、エウテュプロンの議論は前の議論に戻ってしまったのである。つまり、彼が敬虔を一種の世話術であると主張し始め、その後一種の奉仕術と言い換えて、そして最後に神々に嘉納される感謝であるというところに辿り着いた。しかし、ソクラテスはこの「神々に嘉納される」ことが実は「神々に愛される」ことと同じであること示し、彼の主張が結局すでに論駁された一回目、または二回目の定義と同じようことになってしまったことを彼に説明する。こうして、この三回目の議論において、エウテュプロンは自分の言説における矛盾に何回も気づかせられた。そのたびに、彼は、それらの矛盾点はどこにあるのかを徹底的に追求することを避けつつ、ただ議論から逃げようとしていただけである。その結果、彼の主張は再び同じところ、しかもすでに論駁されたところに戻ってきたのである。

以上の検討から、我々は如何にしてソクラテスがエウテュプロンに彼自身の考えを吟味させていたかを感じ取ることができるだろう。ソクラテスはエウテュプロンの答えに対して、ただひたすらそれらの一般的な意味を彼に示しただけであり、それぞれの論理的な正当性を一切問うていなかったのである。このことはソクラテスの対話術のひとつの目的を明らかにすることができると思われる。ソクラテスの対話術は議論のための論術であるのではなく、問題にしている事柄について何らかの知識をもっていると思っている相手に、相手自身の考えた知識はいかなるものなのかを明らかに分らせるための吟味術である。つまり、ソクラテスの対話術は相手に自分のもっていると思っている知識をより一層見つめなおさせるためにあるものである。

おわりに

以上の考察を経て、我々はソクラテスの対話術は「敬虔」のような道徳的な問題に関心を持っている人にとっては重要であるということを理解することができるのであろう。

本編において、ソクラテスとエウテュプロンは最初から最後まで三回にわたって、同じ問題、つまり「敬虔とは何か」について吟味を行っている。なぜ「敬虔とは何か」のような道徳的な問題をソクラテスのような対話の仕方で行う必要があるのか。その理由をエウテュプロンの訴訟において考えてみよう。エウテュプロンは雇い人のために年老いた父親を殺人罪で起訴していた。彼はそれによって父親と周りの身内の人に不敬虔であると批判されていた。この批判に対して、彼らが敬虔についての神々のあり方を知っていないと言い、起訴を続行しつづけた。このように、批判されても起訴を取り下げなかったことはエウテュプロンが自分の行為の正しさに対して確信があるからである。また、その確信を支える何らかの根拠を自分のうちにあると思っているはずである。おそらく、彼と同じように、我々もまた自分の行為の正しさをその正しさを支える根拠に基づいた上で判断するだろう。要するに、その根拠を自分のうちで持っているからこそ、正しいと思う行為を行うことができる。しかし、自分が真であると思っている根拠は実際のところでは真であるかどうかはまだ分からない。したがって、このことを明らかにするために、自分が真であると思っている根拠を、ソクラテスがこの対話編でやっているように言葉を通じて吟味する必要がある。

また、議論がより真実に向かうために、対話の当事者は共に当の道徳的な問題に高い関心を持っていなければならない。本編のように、二人はちょうど同じ時期に訴訟にかかわっている。そして、それらの裁判のために、二人とも敬虔と不敬虔のことを考えているように設定されている。この設定はおそらく「敬虔とは何か」の真実により近づくために、二人の関心の共有の必要性を示すためにあるものであろう。

一方、ソクラテスの対話術において、ソクラテスの立場はほとんど知らない方の側に立って

いる。そして、相手は最初には知っている方の側に立っていて、最後には知らない方になっていく。つまり、対話を交わす二人は共に知っているもの同士でもなければ、ともに知らないもの同士でもない。なぜこのように設定されていたのか。それはおそらくソクラテスがここでは吟味の案内人という役割を演じることになっているからであろう。

吟味は相手に同意を求めることを通じて行われるものである。そして、相手の同意したことを踏まえつつ、相手の主張の意味を確かめていく。この対話編では、エウテュプロンが提出した主張のすべてが彼自身が同意した事柄によって論駁されてしまった。しかし、吟味は「実は知っていない」と認めたとこで終わったわけではない。「我々は敬虔とは何かを最初からもう一度考察しなければならぬ。それを学んでしまうまでは、僕は自分のほうから投げ出したりするつもりはない」(15c11-12) というように、ソクラテスは吟味を続ける必要があるということを示し、自分もずっと吟味の案内人を演じ続けるということを表明した。残念ながら、吟味はエウテュプロンが急いで行かなければならないということによって続けることができなかった。このことはただの口実であるかもしれない。つまり、もしかして完全に論駁されたエウテュプロンはソクラテスとの議論から逃げたかもしれないということである。もし本当にそうであれば、彼が逃げようとした理由は、おそらく知っていると思っていることに対しての今までの自信が論駁されたことによって揺らぎ始めたからであろう。このことについて、少なくともエウテュプロンが三回目の議論の前に投げかけた言葉—「私としては自分の考えをどのようにあなたに言ったものか、さっぱり分からないのです」(11b6-7) から読み取ることができるであろう。

一方、確かにエウテュプロンはその場を逃げ出した。しかし、おそらく彼はこれから「敬虔とは何か」について何らかの形で考えつづけるかもしれない。このように推測することができるのは以下のことによる。即ち、父親に対する訴訟はまだ終わっていないということから

である。今まで絶対に正しいと思っていたこの起訴が論駁されたことによって、彼はきっと動揺しているだろう。しかも、ソクラテスとの対話から逃げ出したことによって、「敬虔とは何か」についての明白な回答に至ることができなかった。つまり、彼は自分の行為の正しさを支える根拠を失ってしまったのである。このようになってしまった以上、敬虔そのものを大事にしているエウテュプロンは、実に不敬虔であるかもしれないような行為を行うはずがない。したがって、この訴訟が間違いなく正しいものであるということを明らかにすることができるまでは、彼はおそらく「敬虔とは何か」を問いつづけるだろう。

以上の推測を支える確実な根拠を残念ながら、文脈から読み取ることができない。しかし、プラトンの対話編をもっと理解しようとするために、このように推測することが必要であるかもしれない。

もちろんそのために、単に『エウテュプロン』だけではなく、他の初期対話編などと対応させながら考察しなければならないと思われる。この作業を今後の研究課題にしたい。

(イウ マンイー, 広島大学大学院
文学研究科博士課程後期 [哲学])